

第2章 社会・地理歴史・公民科における考え方と実践例

1 社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

(1) 教育基本法等に見る資質に関する目標から

我が国の教育は、教育基本法を頂点とした法体系の下で行われる。教育基本法第1条には「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」が明記されている。この条文は、社会・地理歴史・公民科の目標にも示されているものであり、その意味で社会・地理歴史・公民科教育は、教育基本法が示す教育の理念に直接的に迫る崇高な使命をもっていると言える(資料2-1)。

このことから、社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要とされる資質とは、教育基本法及び学習指導要領に示された「公民的資質」であると捉えることができる。

(2) 学習指導要領解説に見る能力に関する目標から

「公民的資質」を養うためには、社会・地理歴史・公民科において、どのような能力が必要であろうか。

『小学校学習指導要領解説社会編』には、社会科の能力に関する目標が資料2-2のように示されており、「社会的事象の意味について考える力」、「調べたことや考えたことを表現する力」など、「社会的な思考・判断・表現」をする力の育成が求められている。これらの能力は、中学校社会科、高等学校地理歴史・公民科においても同様に求められている。

社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要な能力とは、評価の観点で示されている「社会的事象への関心・意欲・態度」、「社会的事象についての知識・理解」、「資料活用の技能」、「社会的な思考・判断・表現」の4能力を統合したものと捉えることができる。

したがって、授業においては、知識や資料活用を習得させるとともに、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力をバランスよく育成する必要がある(資料2-3)。

資料2-1 「教育基本法」と「社会・地理歴史・公民科の教科目標」の関連

【教育基本法(第1章 教育の目的及び理念)】

第1条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

【学習指導要領(小学校 社会科)】

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

【学習指導要領(中学校 社会科)】

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

【学習指導要領(高等学校 地理歴史科)】

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

【学習指導要領(高等学校 公民科)】

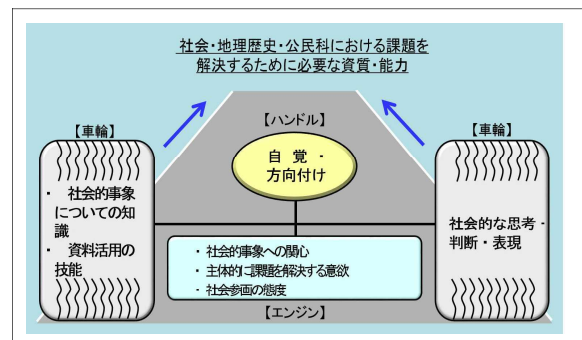
広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。(※ 下線は筆者による。)

資料2-2 社会科の能力に関する目標

- 第3学年及び第4学年
地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
- 第5学年
社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
- 第6学年
社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

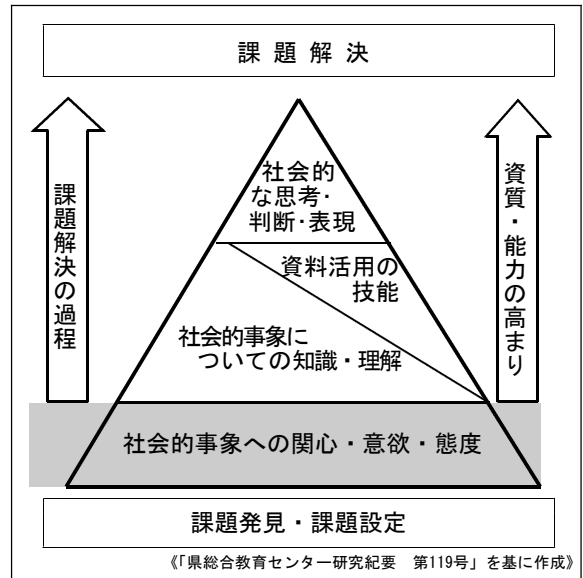
『小学校学習指導要領解説社会編』p.15から抜粋(※ 下線は筆者による。)

資料2-3 課題を解決するために必要な資質・能力



なお、社会・地理歴史・公民科における課題解決に必要な資質・能力は、児童生徒が課題解決の状況を自覚しながら高めていくイメージでも表すことができる（資料2-4）。まず、課題発見・課題設定によって、社会的事象への関心・意欲を高める。次に、課題追究に必要な知識を習得し、社会的事象に関する事実について各種の資料を基に読み取ったり、社会的事象のもつ特色や意味、意義について解釈したりする。そして、これらを活用して思考・判断・表現することで課題解決を図る。本研究は、このような学習の過程で児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習を通して、課題解決に必要な資質・能力の育成を目指している。

資料2-4 課題解決の過程における資質・能力の高まりのイメージ



2 社会・地理歴史・公民科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

社会認識の深まりの度合いは、資料2-5に示すように学習課題の問い方によって変わるため、社会認識形成の段階に応じて設定すべきである。

まず、「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何を」といった問い方は、社会的事象についての事実を知識として直接的に導くものである。

次の段階の「どのように」という問い方は、社会的事象の一般的な傾向や法則性について考察させるものであり、「なぜ」という問い方は社会的事象間の因果関係や事象の理由などについて考察させるものである。

さらに、「どうすべきか」という問い方は、社会的事象について学んだことを活用して、より深く考察させ、判断を求めるものである。

資料2-6に、中学校地理的分野「日本の過疎・過密問題」における学習課題例を示す。資料中に見えどどの学習課題例でも、課題解決的な学習を展開することが可能であるが、【学習課題例1】は、社会的事象についての事実を知ることにとどまる課題であり、【学習課題例2】は、社会的事象の一般的な傾向や法則性を考察させる課題である。

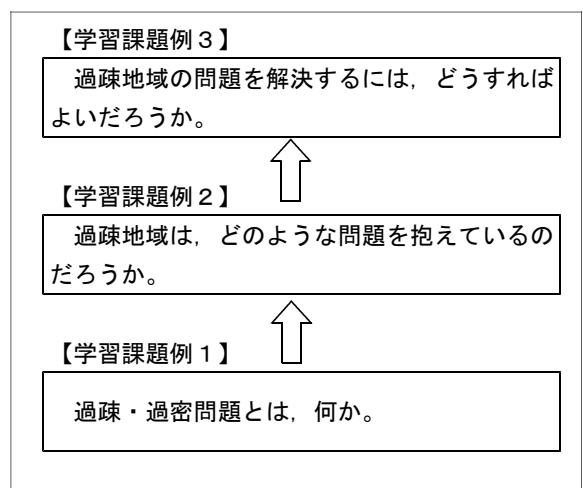
これらに対し、【学習課題例3】は、社会的事象について、私たちが今後どうすればよいかということの判断を迫り、主体的・協働的に学ぶ必要性のある課題となっている。

資料2-5 社会認識形成の段階に応じた学習課題

学習課題の問い方	社会認識形成の段階	社会認識の深まり
・ どうすべきか	・ 学んだことを活用して社会的事象について判断できる。	社会的事象について、より深く理解（認識）する。
・ なぜ	・ 社会的事象間の因果関係等について考察できる。	↑
・ どのように	・ 社会的事象の一般的な傾向や法則性について考察できる。	
・ 何を ・ 誰が ・ どこで ・ いつ	・ 身近な社会的事象についての事実を知る。	社会的事象について、事実を知る（認識する）。

《県総合教育センター指導資料 社会 第112号を基に作成》

資料2-6 中学校地理的分野「日本の過疎・過密問題」における学習課題の設定例



3 社会・地理歴史・公民科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 工夫の視点

社会・地理歴史・公民科においては、これまでにも課題解決的な学習を行う中で、児童生徒が主体的・協働的に学ぶための工夫を大切にしてきた。そのことは、言語活動の充実を図る上でも同様であった。しかし、課題解決的な学習の型だけを重視するあまり、学習課題や学習活動が形骸化した授業も散見された。

前述のように課題解決に児童生徒が、必要な資質・能力を身に付けるためには、課題解決的な学習の中で、習得した知識・技能を活用して思考・判断・表現することが大切である。児童生徒が、主体的・協働的に学ぶ学習を行う中で、「活動あって学びなし」とならないようにするためにも、資料2-7に示すように習得と活用の過程を板書上でも構造的に位置付けることで、児童生徒の深い理解につなげていく工夫が必要である。

(2) 「判断基準」を設定した指導と評価の一体化

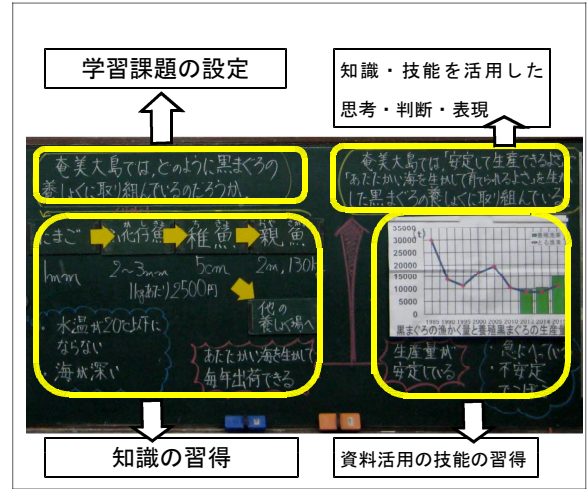
「判断基準」とは、「児童生徒の思考や判断の結果が表現される『説明』や『論述』等において、目標の達成状況を判断する具体的な尺度」のことである（資料2-8）。

資料2-9は、「判断基準」を設定して行った授業実践例である。これは、解決すべき課題や、課題を解決するために必要な知識・技能を明らかにし、習得した知識・技能を活用してどのように課題を解決させるかを計画したものである。

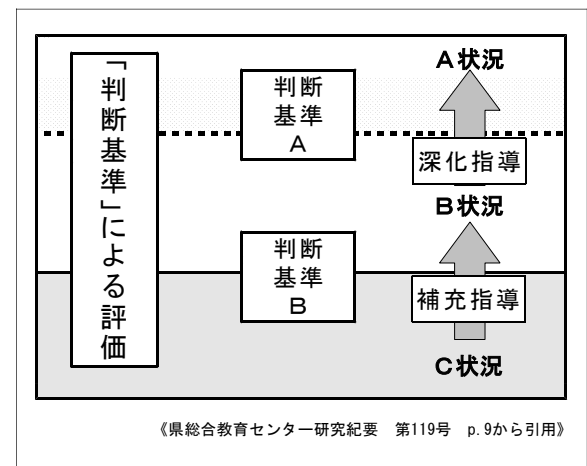
この授業では、様々な資料を基に「ごみ」に関する知識を習得させ、主体的・協働的に課題を解決させることを意図しているため、児童の表現例の中に、「ごみ処理の計画的な取組」、「ごみ減量のための行政、企業の協力」が表現されていれば、おおむね満足できる状況（B状況）であると判断する。この判断の尺度が判断基準Bであり、資料2-9では、吹き出しの部分に示している。

このように「判断基準」を設定した指導と評価は、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習に対しても効果的に用いることができると考える。

資料2-7 習得した知識・技能を活用して思考・判断・表現する流れの見える板書



資料2-8 「判断基準」による指導と評価



資料2-9 「判断基準」を設定して行った授業実践例（小学校第4学年「ごみのしよりと利用」）

過程	課題解決的な学習における習得と活用	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 鹿児島市のごみを減らすには、どのようなことが必要だろうか。	
	学習課題解決のために習得させたい「基礎的・基本的な知識」 ○ 鹿児島市は、様々なごみ減量の取組を行っている。 ○ ごみ袋の有料化や細かい分別を行っている市町村がある。 ○ 企業は、簡易包装やリサイクルなどの取組をしている。 ○ 市民は、3R運動を実施している。	
展開	学習課題解決のために習得させたい「資料活用の技能」 ○ 鹿児島市のごみの種類の割合、処理にかかる費用 ○ ごみの有料化の成功事例と課題に関する文書資料 ○ 大崎町のごみ分別数 ○ リサイクル推進課の方の話	※ 前時までに学習してきたことを踏まえ、鹿児島市で実施した方がよいと思われるごみ減量化のための取組を各自で考える。 ※ 各自で考えたごみ減量の取組の中からグループで選び、その理由についても話し合う。
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 鹿児島市では、ごみ処理のために、市の計画に沿って様々な取組が行われている。市民や企業が協力して、更にごみの減量化に努めていく必要がある。	
終末	予想される児童生徒の「表現」例 鹿児島市のごみを減らすには、市の計画に沿った市民一人一人の努力に加え、市や企業の協力も必要である。	ごみ処理の計画的な取組 ごみ減量のための行政、企業、市民の協力

(3) 自覚・方向付けを促す学習指導の工夫

社会・地理歴史・公民科における自覚・方向付けとは、課題解決的な学習を展開する中で、児童生徒が自分の学習がどのような状況にあるかを自覚し、課題解決のための思考の方向性を決定付けることを意味している。このことは、自分自身で導いた課題解決の案と、他者の案とを比較・検討し、深めることで形成されていくと思われる。

資料2-10は、高等学校現代社会「市場経済のしくみ」の授業実践を示したものである。この授業では、展開前段で学んだ学習内容を生かして、新たな課題【学習課題2】に取り組ませ、複雑に関係した社会的事象の因果関係を追究させるとともに、「市場のしくみ」について深く考察させることを求めている。

このように複数の学習課題を設定して、後から「より高次の問い掛け」を行い、児童生徒がお互いの意見を比較・検討して議論することは、児童生徒自身に新たな視点を気付かせることになる。

資料2-11に学習課題を2題設定した場合の高等学校における授業展開を示す。まず、本時の【学習課題1】の課題解決案について考察し、表現する。次に、【学習課題2】についての課題解決案について考察し、主体的・協働的に学ぶ学習を通して、考えを深める。

「判断基準」の設定の考え方に基づいてこの展開を当てはめると、【学習課題1】で判断基準Bに到達することを求め、【学習課題2】で判断基準Aに到達することを求めることになる。これまで「判断基準」の設定に当たっては、判断基準Bを重視していた。これに加え、判断基準Aを設定して授業を計画することは、生徒が課題追究の状況を自覚し、課題解決への方向付けを行うための学習指導として効果的であると思われる。

これまで述べてきたように、社会・地理歴史・公民科においては、主体的・協働的に学ぶ学習を効果的に取り入れて、いかに児童生徒に課題解決する能力を身に付けさせ、「市民的資質」を高めさせるかが重要である。

資料2-10 高等学校現代社会「市場経済のしくみ」授業実践例

【学習課題1】人気商品が出た場合には、需要曲線あるいは供給曲線がどのように動くか。

価格決定のメカニズムを習得

人気商品が出たら、みんな買おうとするから・・・

お互いの意見を比較する

【学習課題2】もし、「環境税」が導入されたら、ガソリンの価格にはどのような影響を与えるか。また、ガソリンの「市場規模」はどのように変化するか。

税はそのまま価格に上乗せされる？売れないかもしれないよね？こうなると企業はどうするの？

お互いの意見を比較する

環境税を付加することによって供給曲線が左にシフトし、価格は上昇するので、市場規模は縮小する。その結果、ガソリンの消費が抑制できる(またはガソリン以外のエネルギーの市場が拡大していく)。

資料2-11 学習課題を2題設定した場合の授業展開

【学習課題1】 ローマ帝国はなぜ発展したのか？

各班に分かれてローマ帝国の繁栄に関する資料を分析し、各班の資料から読み取れる繁栄の理由を検討する。

主体的・協働的に学ぶ学習

A班 (税制、公共施設) B班 (軍事面、政治機構)
C班 (ローマ市民権) D班 (一神教と多神教)
E班 (ローマ法)

【学習課題1】に対する生徒の課題解決案 判断基準B

ローマ帝国が発展した理由は、様々な人材を登用する発想があり、ローマ市民権を異民族にも与えたことなどが挙げられる。また、水道橋や浴場など実用性を重視する発想が、帝国繁栄の根底をなしているのではないかと考える。

学習内容を生かした新たな視点の問い

【学習課題2】 現代社会の課題を解決する際、ローマ人の知恵や考え方はどのように生かされるか。

主体的・協働的に学ぶ学習

自覚・方向付け

自分の意見をまとめた後、他の生徒の意見を聞いて、最初の自分の意見を再構築する。

【学習課題2】に対する生徒の課題解決案 判断基準A

ローマ人が異民族へ示した「寛容」の姿勢はグローバル化が急速に進む国際社会では重要な概念になるのではないかと考える。一例としてEUのイギリス離脱問題では、移民の流入が課題として挙げられ、ナショナリズムがグローバルリズムかの選択に迫られている。このような問題を解決するにはどこまで移民に「寛容」であるかということになる。私は、イギリスがローマのような「寛容」の姿勢を入れて、民族的な対立を解消するようにして、国際社会に対して協調した方がよいのではないかと考える。

事例発表（1）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究

－主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

〔小学校 第4学年「県の地図を広げて」の実践を通して〕

奄美市立奄美小学校

教諭 枝迫 大明

I 研究実践の目的

本実践は、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して知識・技能を高め、児童が深い学びに向かうよう授業の視点（「学習課題の設定」、「主体的・協働的に学ぶ学習」、「判断基準」、「児童の思考の変容」）を通して実践し、課題解決に必要な資質・能力を明らかにするとともに、日常の社会科授業を充実させることを目的としている。これらの視点を意図した授業を展開することを通して、思考力・判断力・表現力等の資質・能力が身に付き、学習課題に対してより具体的な解決策を提案し、公民的な資質の基礎を養うことを目指している。


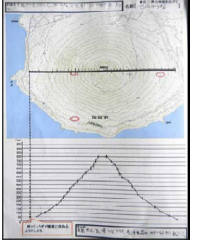
以上のことを踏まえ、第4学年における小単元「県の地図を広げて」の実践を通して検証するものである。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
鹿児島県の広がりや、隣接県、方位・縮尺・等高線等に関心をもち、既習事項を生かして取り組もうとする。	鹿児島県の広がりや、隣接県、地形の特色等について、広がり様子と地形条件とを関連付けながら考えたり、分かったことを絵図や文に表現したりできる。	方位・縮尺・等高線の読み方や使い方を理解し、地勢図や断面図等で扱うことができる。	鹿児島県は日本の南に位置し、南北600kmの広がりや地形条件の違いがあることを理解できる。

2 単元の指導計画（全6時間）

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	鹿児島県内や奄美群島内の地形	○		○		<ul style="list-style-type: none"> 衛星写真を見て県内の土地の様子について意欲的に話し合う。 地図上の色の違いに着目して土地の様子を読み取ることができる。 県内の土地の様子について「地形」や「色」の違いを基に地図を読み取ることができる知識を身に付けている。
3	市町村の位置			○		<ul style="list-style-type: none"> 県内全域の地勢図から、本土においては桜島、奄美群島においては奄美大島を中心として、位置や方位等の読み取りができる。 行政区分図において、桜島を中心として奄美市の位置を捉え、方位や桜島からの距離の表し方について知識を身に付けている。
4	県内の土地の様子 【本時】		○		○	<ul style="list-style-type: none"> 写真と地図を比較し、等高線に着目して傾斜や高さの違いを読み取ることができる。 開聞岳の写真→  等高線の間隔と断面図の傾きを関連付けて考え、等高線が土地の高さや傾斜を表していることを説明できる。 断面図作成用ワークシート→ 
5	鹿児島県の広がり	○		○		<ul style="list-style-type: none"> 県内にある地域の地形を示す写真に関心をもち、場所や山の高さや傾斜等の特色について意欲的に調べようとする。 県内の三つの地域の地形の特色を比較することで、類似点や相違点について説明することができる。
6	47都道府県の位置と名称	○			○	<ul style="list-style-type: none"> 鹿児島県や日本列島全体の地形に関心をもち、47都道府県の位置や名称を進んで調べようとする。 鹿児島県の43市町村、全国の47都道府県の位置や名称及び7地方について視野を広げ、知識を身に付けている。

3 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">等高線を使うと、どんなことが分かるのだろうか。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">等高線を使って作った断面図を作成すると、地形のどのような様子が分かるのだろうか。</div>	開聞岳の写真と地図とを提示し、地図中の等高線に着目させて比較することで等高線について関心をもたせた学習課題を設定する。
	「基礎的・基本的な知識」の習得 (1) 等高線に関する知識 <ul style="list-style-type: none"> ・ 海水面を高さの基準としていること <-----> ・ 太い線は50m間隔で引かれていること (25,000の1地形図) <-----> (2) 断面図に関する知識 <ul style="list-style-type: none"> ・ 稜線の傾き (山の形) を表していること <-----> ・ 等高線の間隔の広狭が土地の傾きを表していること <-----> (3) 言葉に関する知識 <ul style="list-style-type: none"> ・ 開聞岳が「薩摩富士」と呼ばれること <-----> 	学習課題設定に必要な知識を資料から読み取らせ、不足する知識は補足して理解を深めさせる。 読み取り 資料やICTを活用した断面図を基に、地形の高さや傾きの特徴をペアで読み取らせる。 ※ <-----> は、資料活用の技能と知識の習得の関係性を示す。
展開	「観察・資料活用の技能」の習得 ア 開聞岳の地形図 <-----> イ 開聞岳の写真 <-----> ウ 作成した断面図 (ワークシート) と地図ソフト <-----> エ 富士山の写真 <-----> オ 富士山の断面図 (地図ソフト) <----->	
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ア～ウの資料を基に、等高線の間隔と断面図の傾きとを関係付けて考えさせ、等高線を使うことで分かることを説明させる。 ↓ エ、オの資料を基に、等高線や断面図から分かることを関係付けて地形の様子を協働的に考察させる。	ペア・グループごとに習得した知識や技能を活用して、断面図から地形の特徴について話し合わせる。 解釈 , 説明
終末	予想される児童の「表現」例 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">等高線を使うと、土地の高さや、等高線の間隔によって傾きに違いがあることを読み取れる (判断基準B)。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">等高線を使って作った断面図を作成すると、ある方向から見た山全体の形を明らかにすることができる (判断基準A)。</div>	学習課題に対するまとめ (解決) をノートに記述させ、発表させる。 説明 , 論述

III 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 主体的・協働的に学ぶ学習を取り入れることによって、断面図の作成 (より高次の学習課題) に対しても、児童の関心・意欲を高め、判断基準Bに到達させることができた。
- (2) 等高線と断面図を関連付けて考察させるなど、より高次の発問を用意したことで、児童の課題解決の状況に応じた深まりのある学習に取り組ませることができた。

2 今後の課題

児童が思考する過程において、児童自身による振り返りができるワークシートの作成やノートの書き方の指導を工夫する必要がある。

事例発表（2）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究

－主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

〔中学校 第1学年 地理的分野 「世界各地の人々の生活と環境」 の実践を通して〕

長島町立鷹巣中学校
教諭 上ノ町 亮一

I 研究実践の目的

本実践は、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して深い学びにつなぎ、そこから課題解決に必要な資質・能力とは何かということをはっきりとするとともに、そのような資質・能力を育成する授業をどのように行えばよいか、日常において実践することを目的としている。生徒が、社会的事象に興味・関心を高くもち、見通しをもって学習に取り組み、協働的な活動を通して自らの考えを深めるためには、学習意欲を高める学習課題を設定することと、課題を解決するために必要な知識・技能を習得させることを、より効果的に関連させることが重要であると考えている。実生活での宗教との関わり方から、習得した知識・技能を活用して、生徒が深い学びを実現するように授業づくりを行い、生徒の思考がどのように変容したかについては、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用 の技能	社会的事象についての 知識・理解
様々な地域における気候と生活のつながりに関心をもち、意欲的に追究したり、話し合ったりしている。	各地域に住む人々の生活の特徴について、自然環境や文化面から多面的・多角的に考察し、自分の考えを述べたり、ワークシートにまとめたりしている。	雨温図や写真等から、各気候の特徴と人々の生活のつながりについて読み取り、まとめ、発表している。	世界の人々の生活や環境の多様性について基礎的な知識を身に付けている。

2 単元の指導計画（全9時間）

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	雪と氷の中で暮らす人々	○	○		○	<ul style="list-style-type: none"> 雨温図の読み取り方についての知識を身に付けている。 寒帯に住む人々の工夫について意欲的に話し合っている。 イヌイットの暮らしが以前の暮らしと比べてどのように変化したか、意見交換したり文章でまとめたりしている。
2	寒暖の差が激しい土地に暮らす人々		○		○	<ul style="list-style-type: none"> 寒帯の雨温図と冷帯の雨温図を比較することで、冷帯の特徴を読み取り、分かりやすくまとめている。 冷帯で暮らす人々が行っている生活の工夫を、気候の特徴に触れながら適切に表現している。
7	世界に見られる様々な気候と広がり		○		○	<ul style="list-style-type: none"> 森林が形成される気候と形成されない気候の特徴について、学習した雨温図や写真から読み取り、分かりやすくまとめている。 各気候帯と緯度経度にはどのような関係が見られるか、分布図や地図を比較しながら自らの考えをまとめ、表現している。
8	人々の生活に根づく宗教 【本時】		○		○	<ul style="list-style-type: none"> 三大宗教の開祖・経典・分布等について理解し、知識として身に付けている。 資料から、信仰している宗教と人々の生活がどのように結び付いているか具体例を通して考え、適切に表現している。
9	伝統的な生活とその変化	○	○			<ul style="list-style-type: none"> 世界各地の暮らしがどのように変化してきているか、過去と現在の写真から比較して読み取り、分かりやすく表現している。 なぜ衣食住をはじめとする文化が変化してきているのか、身近な生活と関連付けながら意欲的に話し合っている。

3 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 世界の宗教は、人々にどのような影響を与えているのだろうか。 私たちは、異なる宗教を信仰している人と、どのように関わっていく必要があるのだろうか。 </div>	寺院やお盆の写真を提示し、身近な宗教的に行いと生活の関連性について考えさせながら学習課題を設定する。
展開	「基礎的・基本的な知識」の習得 (1) 宗教の特徴及び生活の違い ○ 仏教（開祖：シヤカ，経典：経，発生時期：紀元前5世紀）←----- ・ 東南アジアや東アジアに分布 ・ 托鉢，寺院での参拝等 ○ キリスト教（開祖：キリスト，経典：聖書，発生時期：1世紀）←----- ・ ヨーロッパや南北アメリカに分布，休日の設定，教会での礼拝 ・ イースターやクリスマス等の行事等 ○ イスラム教（開祖：ムハンマド，経典：コーラン，発生時期：7世紀）←----- ・ 北アフリカや西アジアに分布 ・ 1日5回の礼拝，巡礼，ラマダン（断食），豚肉食の禁止等 ○ ヒンドゥー教（インドの古くからの信仰）←----- ・ 多くの神が存在，ガンジス川での沐浴，牛は神聖な動物 (2) 日本にホームステイに来た外国人への対応 ←----- ・ 食事や行動に関して配慮できることがあるかの確認 (3) 神社にいる外国人への声掛け ←----- ・ 神道と呼ばれる日本固有の宗教の存在，「二礼二拍手一礼」 ・ 神道は八百万の神を信仰，神仏習合（神道と仏教の融合）	学習課題設定に必要な知識を資料から読み取らせ、不足する知識は補足して理解を深めさせる。 読み取り ※ ←----->は、資料活用 の技能と知識の習得の関係性を示す。
	「資料活用」の習得 ア 歴史年表（教科書） ←----- イ 開祖・経典・習慣に関する資料（教科書） ←----- ウ ヒンドゥー教（教科書） ←----- エ 世界の宗教分布図（教科書） オ 日本でのホームステイの写真（インターネット） ←----- カ 神社にいる外国人の写真（インターネット） ←----- キ 日本の宗教について（資料集，インターネット） ←-----	資料や分布図を基に、各宗教の習慣や分布の特徴を読み取らせる。 読み取り
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ア～エの資料を基に、信仰している宗教と人々の生活がどのような部分で影響を与えているか考察させる。 ↓ オ～キの資料を基に、自分と異なる宗教を信仰している人とどのように関わっていく必要があるか、協働的に考察させる。	グループごとに習得した知識や技能を活用して、宗教と生活の結び付きと異教徒との関わり方について深く討議させる。 解釈 ， 説明
終末	予想される生徒の「表現」例 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 世界で信仰されている様々な宗教は、分布や歴史的背景等から、衣食住や生活習慣、生き方や考え方に大きな影響を与えている（判断基準B）。異なる宗教を信仰している人と接する時は、その宗教の考え方や行為、習慣等に配慮する必要がある（判断基準A）。 </div>	学習課題に対するまとめ（解決）をノートに記述させ、発表させる。 説明 ， 論述

III 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 実社会や実生活と関連付けた（生徒が「知りたい」と思うような）学習課題を設定することで、主体的に学習しようとする意欲を高めることができた。
- (2) 予習によって習得した「基礎的・基本的な知識」と、写真やICTを活用した効果的な資料提示が、生徒による協働的な学習活動を展開する上で重要であることを再確認できた。
- (3) (1)・(2)を意識した授業実践を重ねるにつれて、生徒が進んで予習に取り組むようになった。その結果、判断基準Bに到達できる生徒が大幅に増え、判断基準Aへ思考を深化させるための話し合いが活発になった。

2 今後の課題

一人で考えることが難しい生徒へ配慮するために、グループ活動のみを重視しがちになる。ペア学習や自力解決の時間をとるなど、学習形態のバランスを取る必要がある。

事例発表（3）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究

－主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

〔高等学校 第3学年 倫理 「近代的自我の確立」の実践を通して〕

県立伊集院高等学校

教諭 岩元 健一郎

I 研究実践の目的

本実践は、生徒たちが課題解決的な学習の中で、習得した知識・技能を活用し、思考力・判断力・表現力の育成を図ろうとするものである。具体的には、公民科倫理において、生徒たちが主体的・協働的に学ぶ学習を行う中で、思想家の作品から知識を習得した後、その知識を活用して、現代社会の課題について思考・判断・表現を行わせるものである。

これまで倫理においては、先哲の思想を知識として捉えて終わることが多く、習得した知識を活用して、具体的な事例に当てはめて考察する学習活動は、十分ではなかったと思われる。

このような反省から、倫理の科目としての目標である「他者と共に生きる主体としての自己の確立」を図る必要がある。本実践では、生徒が主体的・協働的に取り組む実践を通して、課題解決に必要な資質・能力がどのように育成されたか、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用 of 技能	知識・理解
漱石の作品に直接触れることで、その思想から日本の近代化が抱える問題点を把握し、現代社会の課題についての解決策を積極的に考えようとしている。	漱石の指摘した日本の近代化が抱える問題点について、他者との意見交換を通じて、自分自身の意見を再構築し、漱石の思想を基にして、現代社会の課題の解決策を考察している。	漱石の作品から、彼が近代化する日本の問題点をどのように考えていたかを読み取り、学習に役立つ情報を適切に選択して有効に活用している。	漱石の近代化に関する基本的な考え方について、当時の社会的背景と照らし合わせながら理解し、その基礎的な知識を身に付けている。

2 単元の指導計画（全3時間）

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	ロマン主義	○			○	<ul style="list-style-type: none"> 明治期において、封建的な考え方から自我の確立に移行する過程の学習課題に対して意欲的に取り組んでいる。 明治における国家体制建設の進展を背景に、ロマン主義が台頭したことについて基礎的な知識を身に付けている。
2	日本近代化への反省 【本時】		○	○		<ul style="list-style-type: none"> 夏目漱石の思想内容についての資料（原典）を基に、「個人主義」や「他者の個性の尊重」について読み取っている。 日本の近代化が抱える問題点について、夏目漱石と森鷗外の思想を基にして考察している。
3	大正デモクラシーと女性解放のあゆみ		○		○	<ul style="list-style-type: none"> 大正デモクラシーと女性解放運動の展開について基礎的な知識を身に付けている。 日本の近代化がどのように進展していったかについて考察している。

3 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 夏目漱石は「日本の近代化が抱える問題点」をどのように考えたか。 漱石が批判した「他人本位」、「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等使用）をどのように解決すればよいのか。 </div>	授業の目的（主体的・協働的な課題解決学習）、本時の目標、タイムテーブル、態度目標（グループ・クラスで全員ができるまで）を理解させる。
	「基礎的・基本的な知識」の習得 Q 1 日本の近代化の特徴とは。 <-----> A 1 日本の近代化は「外発的開化」である。 Q 2 日本の近代化が抱える問題点とは。 <-----> A 2 日本人は「空虚の感」や不安の中に生きている。 Q 3 これからの日本人はどうあるべきなのか（二つ）。 <-----> A 3 ① 「自己本位」に生きる個人主義を掲げ、「内発的開化」へと変化させていく必要がある。 ② 他者の個性も尊重できるような倫理性の高い個人主義が求められている。 Q 4 「自己本位」の問題点とは何か。 <-----> A 4 強すぎる自我意識の形成により、利己心（エゴイズム）に陥る危険性がある。 Q 5 晩年の漱石が求めた東洋的な心の境地とはどのようなものであったか。 <-----> A 5 エゴイズムを捨て、自我を超越した自然（天）の在り方に則して生きるという無我の境地（則天去私）。	それぞれの課題について、資料（原典）を基に、グループ内で話し合い、出された意見をワークシートに記入させる。 グループのリーダー同士で、それぞれのグループ内で出た意見を共有させ、それぞれのグループに戻って、自分たちのグループでは出なかった意見について説明させる。 ワークシートの課題ごとに、班のリーダーが、資料を用いながら意見を発表させる。他の生徒は、各グループの発表と教師の補足説明を聞きながら、問いの答えをまとめさせる。 ※ <----->は、資料活用 of 技能と知識の習得の関係性を示す。
展開	「資料活用 of 技能」の習得 Q 1 『現代日本の開化』 <-----> Q 2 『現代日本の開化』 <-----> Q 3 『私の個人主義』 <-----> Q 4 『吾輩は猫である』、『三四郎』、『こころ』 <-----> Q 5 『草枕』、『断片』 <----->	
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ○ 漱石が批判した「他人本位」「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等使用）をどのように解決すべきかについて思考・判断する。	
終末	予想される生徒の「表現」例 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 日本の近代化は外発的開化であり、日本人は不安の中に生きている。これからの日本人は、自己本位で主体的な自我の確立（個人主義）と、他者の個性も尊重する高い倫理性が必要である（判断基準B）。 </div> ○ 「他人本位」の事例 周囲からの孤立を恐れるあまり、自分を出せない若者が増えてきている。こうした風潮が、いじめなどの社会問題につながっていると考えられる。他人を傷つけるものでなければ、他人と異なることを恐れず、もっと自分の意見を言ったり、自分が正しいと思う行動をとるべきだと考える。 ○ 「エゴイズム」の事例 位置情報ゲームアプリ等の使用により、個人的な欲求からゲームに熱中することによる事件や事故が多発している。公共の空間においては、周囲に迷惑をかけない範囲で、個人の欲求の追求を行うべきだと考える（判断基準A）。	現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等使用）に関する記事を基に、その解決方法について、習得した漱石の思想を活用させながら、グループ内で話し合わせ、ワークシートに記入させる。 代表者に、グループで話し合われた意見について発表させる。 本時を振り返らせる。

III 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 学習課題を複数設定することによって、より高次の課題への追究意欲を高めることができた。
- (2) 主体的・協働的に学ぶ学習を行うことにより、自己の学習状況を自覚させ、課題追究への方向付けを行わせることができた。

2 今後の課題

判断基準Bの達成状況から判断基準Aへの深化を促す発問を、更に工夫する必要がある。